

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—
A Semantic Study on the Japanese Focus Particle ‘SAE’
-From the Perspective of Modality-

唐 彬
北京航空航天大学

要旨

本研究は、『例解古語辞典』と『中日対訳コーパス』で検索した用例をもとに、取り立て助詞「さえ」を糸口として、モダリティとのかかわりという新しい視点から、「さえ」の意味用法の特徴を考察した。その結果、取り立て助詞「さえ」の実質的な意味は、命題内容に付与する話し手の主観的態度にほかならないということを明らかにした。また、文末形式のみに注目するというモダリティ研究の現状から抜け出し、研究の目を文中形式にまで広げていくという方法論の可能性を検討した。

キーワード：モダリティ、文中形式、取り立て、心的態度

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察 —モダリティとのかかわりから—

唐 彬
北京航空航天大学

1. はじめに

発話によって伝わる情報には、客観的なものだけではなく、主観的なものも含まれている。日本語学には、このような主観的なものに対応する概念として「モダリティ」と呼ばれるものが存在する。中右（1979）が文は命題とモダリティからなるという観点を提示して以来、モダリティに関する研究は日本語学の領域において長きにわたり注目されてきた。益岡（1991:10）は、「日本語はモダリティを高度に構造化した言語である」と指摘した。多くの研究者は主に文末におけるモダリティを巡って研究を展開しており、その研究は文末形式のモダリティの構造から機能までレベルの高いものとなっている（奥田 1985；尾上 1998、2001；仁田 1991、2000；野村 2003；益岡 1991、1997、2000）。

従来の研究は、文末形式が日本語モダリティの最も重要な表現類型であるゆえ、文末形式を手掛かりに行われていた。しかしながら、文末形式を中心とする日本語モダリティに関係する言語事象及びその構造が基本的に解明されている現在、文末形式だけを研究対象とするのはもはや不十分である。渡辺（1971）は、文末形式だけではなく、話し手の心的態度は「そしたらネ、船が傾いてネ、みんな大あわてさ」など間投助詞の形でも表現されると指摘し、従来の文末形式の研究とともに、文中形式に注目する研究の必要性を示唆した。この背景を踏まえ、張（2004）は、中国語の立場から「モダリティの文中形式」という概念を初めて提唱し、日本語と中国語の両言語のモダリティ研究の現状を鳥瞰しながら、文末形式のみならず文中形式にも研究の重点を置く必要性を示唆した。

取り立て助詞に関する研究には、宮田（1948）、教育科学研究会（1963）、鈴木（1972）、奥津（1974、1986）、高橋（1978、1983a、b）、寺村（1981、1984、1991）、沼田（1986）等がある。これらの先行研究は綿密な考察がなされているが、形態論上のカテゴリーとして主に構文論的特徴に着目するに留まり、取り立て助詞全体の深層的な特徴までは及ばず、それぞれの取り立て助詞の間のつながりも論じていなかった。また、先行研究は取り立て助詞各語の各機能を分析したが、それらの各機能の間にどんな関係を持っているか、基本的な機能は何であるかについて明らかにしなかった。

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

モダリティという視点から、取り立て助詞を考察する研究は従属節述部のモダリティに焦点を当てるものが多い(市川 1991; 茂木 2006; 沼田 1989, 2000; 野田 1995;)。上記した先行研究において、各々は形式的観点からの研究を行ってはいないものの、意味的観点からの研究は行われていない。そのため、取り立て助詞の本質が文中形式のモダリティとどのような関係があるのかは明らかになっておらず、文中形式のモダリティが存在するのかについては未だ不明瞭な状態にあると言える。

本研究は、張(2004)により指摘された問題意識を的確かつ現実的なものであると捉え、文末形式のみに注目するというモダリティ研究の現状から抜け出し、研究の着眼点を「文中形式」にまで上げていく議論の可能性を見出すことを目的とする。そのため本研究では、現代日本語の取り立て助詞の中から「さえ」を選び、モダリティの文中形式という視点からその意味用法の特徴を考察する。

以下、第2節では、研究の枠組みについて述べる。第3節では、「さえ」の意味用法に関する先行研究及び問題点を整理する。第4節では、第3節で見られた「さえ」の各意味をモダリティとのかかわりから考察する。そして、第5節では本研究で明らかになったことをまとめる。

2. 研究の枠組み

2.1 モダリティの定義

モダリティは、実に、研究者によって様々に定義されているが、客観的な事柄や出来事に対する「話し手の心的態度を表すもの」¹という点では共通している。その中、中右(1994:43)は、モダリティの定義を三つの要素から成る複合的な概念と見なしている。それらは、①心的態度かどうか②心的態度が発話時点のものかどうか③心的態度が表現者のものかどうか、である。これら三つすべてを満たすものが典型的なモダリティであり、いずれかを満たさないものは典型性が下がる。本研究では、上記したモダリティの三要素を参考にしつつ、「発話内容に関わる」という要素を付け加えて、モダリティは「話し手の、発話時の、発話内容に関わる心的態度」から認定されるとする。

本研究は「さえ」の各意味についての先行研究を概観する上で、モダリティを認定する基準をもとに、先行研究で述べた各意味を詳しく考察したい。ここで必要となる

¹ 張(2004:141)を参照されたい。原文は中国語「Modality 的功能是在句子中“表示说话人的判断和言语表达的态度”」である。

のは、「さえ」の各意味合いをモダリティとの関連において特徴付けることである。言い換えれば、「さえ」という言葉の本質的な特徴は一体何であろうかということである。本研究は、依然としてモダリティ研究で従来注目されてきた文末形式の分析を強調する伝統的な立場を踏襲しながらも、「さえ」の各意味を分析することを通して文中形式にまで広がるモダリティの可能性について検討する。

2.2 研究対象

取り立て助詞の中から、「さえ」を選んだ理由は以下3点である。第一に、「さえ」が現れる主節だけではなく、従属節にも話者の主観的価値判断が含まれるからである。第二に、「さえ」は多義性²を持っている典型的な取り立て助詞であるからである。各辞書³によると、「さえ」は添加（強風に加えて雨さえ降りだした）、推測（初心者でさえすぐにできる）、限定（書物さえあれば満足だ）という三つの意味を持っており、言語記号「さえ」が多様な意味用法で使用されているからである。第三に、「さえ」とモダリティの関係を記述しようとする従来の試みには不足なところが残っているからである。例えば、劉（2005）は、「も」「まで」との対比を通して、意外を表す機能は、「も」「まで」の附属機能であるのに対し、「さえ」の本質的な機能であるということを証明し、また「さえ」はモダリティの表現形式の一種であると指摘した。しかし、劉（2005）は意外の「さえ」にのみ焦点を置き、対比という簡単な方法で分析したため、説得力に欠けている。邸（2005）では構文論、意味論、語用論という三つの次元から、取り立て助詞「さえ」「まで」「も」とモダリティのかかわりを大まかに考察した結果、「さえ」は一定の依存度を持っている「モダリティの呼応要素」であるという結論に至った。しかしながら、「さえ」の各意味との関連性を論じなかったため、本質的なものは見出せなかった。したがって、本研究では「さえ」の意味機能を「モダリティの文中形式」の視点から研究を行う。

2.3 モダリティの文中形式の設定

日本語の文構造について考える際、文を二つの部分に分類することができる。文の

² Johnson（1987）・山梨（1988）等を参照されたい。ここでの「多義性」は「多用法」も含んだ広義のものである。

³ 『広辞苑第6版』や『新明解国語辞典』、『大辞林第三版』などを参照。

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

客体的な事態を表す部分を「命題」⁴と言ひ、主体の心的態度を表す部分を「モダリティ」⁵と言う。例えば：

(1) 雨が降るだろうね。

- a. 「雨が降る」という部分は客体的な事態を表すものであり、命題を表している。
- b. 推量を表す「だろう」と聞き手に確認する気持ちを表す「ね」は主体の心的態度を表すもので、モダリティを表している。

その中で、「だろう」は命題めあてのモダリティ⁶、「ね」は聞き手めあてのモダリティ⁷と表現することができる。しかし、ここでのモダリティは文末形式に限られていることが特徴として挙げられる。

渡辺（1971）は、文末形式だけではなく、話し手の心的態度は間投助詞の形で表現されると指摘している。それでは、間投助詞を用いない場合には、他の形式で話し手の心的態度を文中で表すことはできるのだろうか。取り立て助詞「さえ」を用いることによって、話し手の心的態度が文中で表現されている。その例を以下に示す。

(2) 彼は自分の名前さえ書けない。

この例は、「自分の名前」が「さえ」によって取り立てられていると考えられるが、この文における「さえ」を取り除いた場合、「彼は自分の名前を書けない」という「言内の意味」⁸しか表せないことになる。つまり、前後の文脈に関係なく、客観的事実あるいは命題だけが述べられている。「さえ」を付加することによって、「普通の人間なら自分の名前ぐらい書けるでしょうが、やはり彼は頭がおかしい」や「彼は自分の名前以外の漢字ももちろん書けない」などの特定の意味が命題に付与されることになる。

⁴ 仁田（1991）、益岡（1991）、日本語記述文法研究会編（2003）などによると、文において客観的内容を表す「命題」と対置される「話し手の主観的把握」（話し手の発話時における心的態度）を「モダリティ」と呼ぶ。

⁵ 注4と同じ。

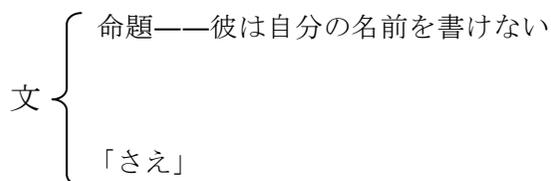
⁶ 仁田（1991）は、モダリティを大まかに「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の二種類に分類した。本研究では「命題めあてのモダリティ」と「聞き手めあてのモダリティ」と呼ぶ。

⁷ 注6と同じ。

⁸ 伊藤（2006:31）によると、「言内の意味」とは「特定のコンテキストに関係なく、文字どおり、純粹に文法的知識だけで得られる意味しか持たない」ということである。

さらに分析を進めると、この用例は二つの部分、つまり命題と「さえ」に細分化することができる。

図1：文の構造



命題「彼は自分の名前を書けない」という部分は客体的な事態を表すものである。取り立て助詞「さえ」が表す意味とその役割をもたせるのは話し手であるはずである。では、この「さえ」はどう説明すればいいのか。

話し手は事前に、彼は難しい漢字は書けないかもしれないが、自分の名前は流石に書けると思ったが、結局その予測に反して自分の名前を書けない。その思うことと現実のことの差から生まれた意外な気持ちを表すために話し手は「さえ」を使用したと考えられる。要するに、「さえ」を用いることは、命題内容に付与する話し手の主観的態度を示し、決して命題そのものに関する客観的描写ではない。「さえ」という助詞で、話し手の心的態度（ここでは意外の気持ち）を表して、本来のセンテンスに主観的なものを加えた。いうまでもなく、命題に対する話し手の主観的判断と評価はモダリティの範疇に属しているものである。したがって、「さえ」は「だろう」と同じように、命題めあてのモダリティに属するといえる。ただ、「さえ」と「だろう」の唯一の区別は、文中での位置づけである。「だろう」は文末形式のモダリティであるのに対して、「さえ」は文中形式のモダリティと呼ぶことにしたい。ここまで、取り立て助詞「さえ」を概観することを通して、文中形式にまで広がるモダリティの可能性について検討してきたが、以下の部分でこの議論をより深化させていきたい。

3. 「さえ」の意味用法及びその問題点

3.1 「さえ」の意味用法

日本語の取り立て助詞「さえ」の意味機能における重要な先行研究として、此島（1966）、沼田（1986）、菊地（1999）などを挙げることができる。

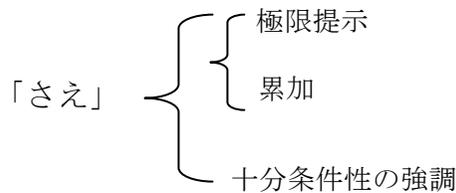
此島（1966）は、「さえ」の歴史的変遷を述べたものである。「さえ」が中古以後「だに」（＝限定）、「すら」（＝特出）に代わって用いられるようになったこと、そして添加用法を表す「まで」が「さえ」に取って代わられたことが述べられている。

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

沼田（1986）は、「さえ」の意味機能を「意外」の「さえ₁」と「最低条件」の「さえ₂」に分けたものである⁹。(3)に「意外」の「さえ₁」を示し、(4)に「最低条件」の「さえ₂」を示す。

- (3)¹⁰ 1日に2度のお粥さえ₁忘れられた。
(4) 社宅さえ₂あれば勤める。

一方、菊地（1999）は「さえ」の用法を、次のように「極限提示」と「累加」、「十分条件性の強調」といった二大別、三種類に分けている¹¹。



(5) が「極限提示」の例であり、(6) が「累加」の例である。

- (5) 花子や三郎だけでなく、太郎さえ来た。
(6) X家は不運が重なった。ご主人が失職し、奥さんが入院し、一家の頼みの綱である長男のA君さえ就職試験に落ちた。

(5) は、「花子や三郎が来る」ことよりも実現可能性が低いと思われていた「太郎が来た」ことが実現されたことを表しており、これを菊地（1999）は「極限提示」と呼んでいる。(6) の場合、「長男が就職試験に落ちたこと」は「ご主人の失職」「奥さんの入院」と同じように「不運」という範疇の事柄ではある。しかしながら、「就職試験に落ちたこと」は不運の度合いの極限に位置づける必要はなく、ただ不連続きの家に起きた最後の事態にすぎない。これを、菊地（1999）は「累加」の用法と呼んでいる。

各辞書¹²によると、「さえ」の意味は三つに分けられることが多い。次は例として松村（1971）における「さえ」の意味を列挙する。（例の一部を略す）

⁹ 「意外」の「さえ₁」と「最低条件」の「さえ₂」は、意味の違いだけではなく、沼田（1986）が指摘しているように、「さえ₂」は必ず条件文中に存在するという構文的違いもある。

¹⁰ 例文の番号は、本研究の順序に従う。

¹¹ この点に関しては菊地（1999:19-21）を参照のこと。

¹² 注3と同じ。

- ① 極端な場合を例示して、他の場合も当然であることを類推させる。
例 専門家の彼(で)さえ知らなかった。
- ② そればかりでなく、さらに加わる意を表す。「・・・まで」の意。
例 雨ばかりでなく、風さえ吹きだした。
- ③ 「・・・さえ・・・ば」と、条件句の中で用いられ、ある事柄についてその条件が充足すれば、その事柄が成立する意を表す。
例 金さえあれば、何でもできると思っている。

3.2 問題点

以上からわかるように、「さえ」の意味は、現在では二つか三つに分かれるが、それぞれは同一の語源を持つわけではなく、もともと三つの意味が別々に存在し、それぞれ異なる表現を有していたが、時代が進むにつれてそれぞれ別の経緯で、「さえ」のみで表現されるようになったと考えられる。

また、以上で述べてきた先行研究の対応関係を見ると、菊地（1999）の「極限提示」と「十分条件性の強調」は、それぞれ、此島（1966）の「特出」と「限定」、沼田（1986）の「意外」と「最低条件」、松村（1971）の①と③に対応する。一方、菊地（1999）の「累加」は松村（1971）の②と一致するが、此島（1966）と沼田（1986）は、「まで」がその用法に取って代わっていると述べ、「さえ」の用法には累加を入れていない。まとめると、表1のようになる。

表1：「さえ」の意味機能に関する先行研究のとらえ方

	「さえ」の意味機能		
此島(1966)	-	特出	限定
沼田(1986)	-	意外	最低条件
菊地(1999)	累加	極限提示	十分条件性の強調
松村(1971)	類推	加わる	条件

先行研究では、「さえ」の意味は二つ、あるいは三つに分類されている。菊地（1999）「累加」の意味は「極限提示」でも説明できるので、本研究では、「さえ」の意味について三つあるという立場を取り、「添加、類推、限定」という用語を用いる。

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

表1にまとめられている「さえ」の意味機能に関する先行研究の捉え方について、下記のような問題点を指摘することができる。第一に、此島(1966)は「さえ」の「添加」の意味だけを論じているという問題点がある。第二に、沼田(2009)は「強風に加えて、雨さえ降り出した。」という文の中の「さえ」について触れていない、「意外」と「最低条件」の間の関連性も論じていないという問題点がある。第三に、「さえ」について、ただ「さえ」の各意味用法を論じたが、各意味の間にどのような関連性を持っているのか触れなかった。

本研究では、「さえ」の意味機能に基づいて、『例解古語辞典』¹³と『中日対訳コーパス』¹⁴で検索した用例を対象にして分類し、先行研究で言及された三つの意味を詳しく考察する。以下では、なぜそれぞれの意味があるのか、なぜそれぞれの意味を表すのか、三つの意味はお互いにどのような関係を持っているのかといった三つの課題に沿って、本研究を進めていきたい。

4. 考察

3節からわかるように、「さえ」の意味は基本的に添加、類推、限定に分類されている。4節では、「さえ」の各意味をモダリティのかかわりから考察する。

4.1 添加の意味

まず、添加の意味を表す「さえ」の例文を見ていこう。

(7) ただ涙にひちて明かし暮らさせ給へば、見奉る人さえ露けき秋なり。

『源氏・桐壺』

(8) 一時的な要因さえ加わった。

『激動の百年史』

¹³ 「例解古語辞典」を使用したのは「さえ」の歴史的な変遷を明らかにするためである。

¹⁴ 「さえ」に対応する中国語表現を利用して、「さえ」の意味を深く理解するために、本研究は北京日本学研究中心によって開発された『中日対訳コーパス』(第一版)を利用した。『中日対訳コーパス』には日本文学作品22篇、中国文学作品23篇とそれぞれの訳本をあわせて計105件(約1130.3万字)を収録している。それに、文学以外の作品を、日本14篇、中国14篇、日中共同2篇とそれぞれの訳本をあわせて計45件(ほぼ574.6万字)を収録している。このコーパスは収録した作品のジャンルとそれに対応する訳本が豊富であり、話題の偏りが研究に及ぼす影響が少ないゆえ、本研究は、この『中日対訳コーパス』を用例収集の有効なデータベースとして利用することにした。

此島（1966）と各辞典の解釈によると、これらの用例の中の「さえ」は作用と状態の程度が加わったり、範囲が広まったりする意を表し、「その上...まで、...までも」と同じ意味である。例(7)は、愛人が死んだから、帝は涙に濡れて日をお送りになり、元々悲しんでいる人は帝だけだったが、そのうちにこのような悲しがる帝を見る人も心が湿っぽくなったという意味であり、「さえ」は人の添加を表す。例(8)でも、「さえ」は「添加」の意味をしており、もともとの原因の上にさらに一時的な原因が加わった。その加わった原因は「戦後日本では、兵士の帰還などで一時出生率が高まったあと、バース・コントロールなどで出生率が低下した。そのため、養うべき幼児の数が減ってしかも若年労働者が多数得られるという、一時的ではあるがたいへん有利なことがあった」という現象である。

しかし、以上の解釈はただ「添加」の意味を説明した。その本質的な性質は何であろうか。歴史的に見れば、最初に、「さえ」は動詞「そ（添）う」の連用形「そえ」から生じたという。《例解古語辞典》によると、動詞「添う」の定義は「①その上に加わる。②付き添う。そばにいる。③番目の意味も人の添加を表す」である。つまり、「添加」の意味は、最初から古語「さへ」の本来固有の意味で用いられていたものである。しかしながら、時代が進むにつれて「さへ」がこの意味以外で本来「だに」でのみ表現されていた類推の意でも広く使用されるようになると、「だに」と混同されて添加ではなく単なる強調として「さへ」が使用されようになった。そのうちに逆に「だに」が「さへ」の意味で使用されるようになったものの、中世後期以降は「さへ」の勢力が復活し、添加の意味でも「さへ」が使用されるようになり、今日に至ると考えられる。つまり、「さえ」という単語は、本来単なる添加を表していたが、そこに「だに」の影響を受けて強調のニュアンスも含んだ添加へとその意味が変化していったと考えられる。

総体的に見れば、(7)は「見奉る人」の添加を通じて、帝の悲しさを強調するのである。その強調の気持ちは話し手に属する。「さえ」で話し手の心的態度を表す。(8)でも話し手のその加わった原因への意外の気持ちも表れて、気持ちの添加も言えよう。添加の「さえ」に見られるモダリティ性を表2のようにまとめる。

表2：「さえ」に見られるモダリティ性（例7、8の場合）

発話時	話し手が発話する時
命題内容めあて	ただ涙にひちて明かし暮らさせ給へば、見奉る人が露けき秋なり。 一時的な原因が加わった。
話し手の心的態度	帝の悲しさを強調する。 その加わった原因への意外の気持ちを表す。

4.2 類推の意味（意外のさえ）

次に、意外を表す「さえ」を例(9)から(11)を見る。

- (9) さすが、日本を喰いあげた私でさえ、アンナの桃色の乳房、私の身命を賭けて戦う。 吉行エイスケ『恋の一杯売 love on Drought』
- (10) しかるに従来の政治が、国民の幸福はおろか、国民の存在をさえ無視したと
いうことはいったい何を意味するか。 伊丹万作『政治に関する随想』
- (11) 現にヨーロッパにおいてさえも耶蘇会は国権主義の強かった各国では次々と
禁止されたことがある。 『マッテオ・リッチ伝』

各辞典の解釈では、この時の「さえ」は程度の軽いものをあげて、それ以上のものを推測させる機能があり、「...でも、...でさえ」とも言い換えれる。つまり、ある集合関係項を抽出して、集合の中のメンバーを全面肯定或は全面否定することで、極端の意味を表す。沼田（2009）の解釈によると、この「さえ」は「意外のさえ」になる。しかし、この解釈の性質はどこにあるのか。他のもっと有効的な解釈が存在するのか。

この用法は、古語「さへ」の用法②類推の流れをくみ、中世までは「だに」という別の副助詞で表現されていた。「だに」という単語は、①強調②類推③添加という三つの用法を有するが、もともとは①強調の意味でしか使われておらず、②類推の意味では平安時代以降に使われるようになったとされる。このような経緯から、平安時代以降、類推の意味で「だに」が使用された場面では、強調のニュアンスも含まれていたと考える。この強調のニュアンスを含んだ類推の用法は、中世（日本における中世は12世紀末鎌倉幕府の成立から16世紀末室町幕府の滅亡まで）以降「だに」の代わりに「さへ」が「類推」の意で使用されるようになって引き継がれ、現代にいたるのではないだろうか。

例(9)から見れば、一方お金がなく、衣食の問題を解決できない私でもアンナの桃色の乳房のために、身命を賭けるから、普通の余裕のある人は当然賭けて戦う。つまり、そのことをする可能性の最も低い私を取り立て、それについて成立することを示し、それより可能性の高い人はもちろん成立することを意味して、全面肯定するのである。

さらに考察すると、この文章に特定の含意を付与するのは他者ではなく話し手自身である。すなわち、話し手こそがこのような極端な事例を挙げて他の事例を類推する。したがって、話し手の発話時の心的態度は「さえ」によって表現されるということになる。

表3：「さえ」に見られるモダリティ性（例9の場合）

発話時	話し手が発話する時
命題内容めあて	日本を喰いあげた私はアンナの桃色の乳房、身命を賭けて戦う。
話し手の心的態度	その乳房の魅力を強調している。

例(10)を見ると、国民の幸福より、国民の存在は最も基本的な物であり、最も無視すべきでない物であるにもかかわらず、従来の政治は国民の存在を無視した。つまり、最も基本的なもの、すなわち国民の存在でさえ無視されるのであるから、その他の一切はもちろん無視されるということを強調している。「さえ」を用いることで、話し手の政治に対する否定的な姿勢が表現されている。

表4：「さえ」に見られるモダリティ性（例10の場合）

発話時	話し手が発話する時
命題内容めあて	従来の政治が、国民の幸福はおろか、国民の存在を無視した。
話し手の心的態度	政治に対する否定的な姿勢。

例(11)も(9)、(10)と同様に解釈できる。いずれの例も「さえ」で話し手の心理的な態度が表されている。話し手は、自身から見れば可能性の最も低いものあるいは最も高いものを選んで取り立てて、他のものを推測する。つまり、話し手こそが事柄の可能性が低いか高いかという判断を下すのである。

4.3 限定の意味（最低条件のさえ）

最後に、例(12)と例(13)は限定の意味を表す「さえ」である。

(12)「ええ」杏子は、梶がさくらさくらと言うが、折角出掛けて行っても、おそらくさくらなんか見ないだろうと思った。行きさえすれば、それで気がすむのだ。

『あした来る人』

(13)わいのたべも・と、わいの着るも・さえみてくれたら、あそんでてもええのんどす。

『越前竹人形』

これらの場合の「さえ」は、広辞苑の③番目、新明解の②番目に記載の用法で用いられている、仮定条件と共に使用される「さえ」である。この「さえ」の成立の経緯は、前述の推測の意味と同じである¹⁵。各辞典の解釈では、以上の例文にある「さえ」

¹⁵ 松村（2012）を参照。

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

は仮定条件を表す文の中に用いられ、取り立てる条件が満たされればほかのものは不問にする意を表す。つまり、ここでの「さえ」は「限定」の意味を表す。沼田 (2009) によると、「最低条件のさえ」になる。その「限定」にせよ、「最低条件」にせよ、その意味の性質的なものは何であろうか。

例(12)を分析すると、「梶」の気を済ませる方法は、例えば、説得することや脅迫することなど様々あると考えられる。その中で、一番有効な方法は彼自身が現場に行くことであると話し手が考えていると推察できる。つまり、「梶」の気を済ませる方法が「行くこと」に限定されている。

要するに、この場合には、話し手は自分の判断によって、一番重要なものを抽出し、限定して強調する。この「強調」の心的態度はほかのものではなく「さえ」によって表現されているのである。そして、話し手は「行けば、気がすむのだ」という命題内容に対する自身の主観的な判断は、発話時の心的態度で表現されている。話し手こそがその条件を限定するのである。

表 5：「さえ」に見られるモダリティ性 (例 12 の場合)

発話時	話し手の発話時
命題内容めあて	行けば、それで気がすむのだ。
話し手の心的態度	「行く」という条件への強調

例(13)を見ると、「私の衣食を見てくれる」という条件が満たされると、相手が自分のやりたいようにやることを邪魔しないと話し手が要求している。話し手にとって、「衣食を見てくれる」ことは唯一の条件である。他の条件、例えば、「お金を送る」「毎日一緒にいる」などは一切必要としていないことが推察できる。つまり、話し手は自身の主観的な判断によって、様々な条件がある中で順序に並べ、自分にとって最も重要な条件を選んでいることを強調する。

表 6：「さえ」に見られるモダリティ性 (例 13 の場合)

発話時	話し手の発話時
命題内容めあて	わいのたべも・と、わいの着るも・みてくれたら、あそんでもええのんどす。
話し手の心的態度	「私の衣食を見てくれる」という条件への強調

4.4 「さえ」とモダリティのかかわり

各々の意味の表す心的態度をこれまで考察してきたが、各意味の成り立ちが異なっていることが分かった。また、それぞれ現代の用法では共通する心的態度があるが、それはすべて「だに」から影響を受けているのも大変興味深い。各例文の共通点をまとめると、それらの文中の「さえ」は述語動詞との間に直接的な修飾関係がなく、機能は命題に対する話し手の判断と表現者の心的態度を表し、文全体を修飾することにある。各意味を各センテンスに附加する権利は永遠に話し手にある。モダリティとのかかわりから見れば、「さえ」の各意味の特徴は前述したモダリティの三つの基準と合致する。「さえ」に見られるモダリティ性をまとめると表7のようになる。

表7：取り立て助詞「さえ」に見られるモダリティ性のまとめ

発話時	話し手の発話時
命題内容めあて	客観的な内容
話し手の心的態度	話し手の判断と表現者の心的態度

「さえ」の意味は、一般的に認識されているモダリティというカテゴリーの概念内容に本質的に相通じるものである。「添加」にせよ、「類推」にせよ、「限定」にせよ、すべての意味は話し手の心的態度によって決定される。いずれの場合も、文のどの構成部分が話し手の心的態度を表す働きをしているのかということ、取り立て助詞「さえ」なのである。つまり、「さえ」の各意味はモダリティと結合した関係にあるということが言えるだろう。話し手は、「さえ」という助詞を用いることで自身の心的態度を表し、命題となる本来のセンテンスに主観的なものを付与している。この命題に対する話し手の主観的判断と評価はモダリティの範疇に属しているものである。

ここまで論じたことから見れば、「さえ」は「だろう」と意味的には同じである。ただ、「さえ」と「だろう」の唯一の区別は、文中での位置づけであるが、命題めあてのモダリティに属する。「だろう」は文末形式のモダリティであるのに対して、「さえ」は文中形式のモダリティと呼ぶことができる。

5. 終わりに

以上、取り立て助詞「さえ」の意味について再考察した。その中で、「さえ」がもつ各意味の間にどのような関係性が存在するのかという問題が解決された。それは、「さえ」の各意味はモダリティと結合しており、「さえ」の本質的なものは「話し手の発話時の命題への心的態度」ということである。

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

そして、本研究はアプローチの目を文中形式の方に適度に調整してみた。視点を転移していくことによって、今までに気づかれなかったような事実が発見され、明らかになってくる可能性が示され、少なくとも従来の研究成果を違う角度から検証することができた。その意味では、新たな視点から研究を試みアプローチすることは、モダリティ研究の進展にとってきわめて有益なことであり、注目に値するものであると言える。

また、本研究は意味論という次元のみから「さえ」を考察してきた。構文論や語用論の視点から同じように言えるか否かをさらに考察する必要がある。また、もし他の取り立て助詞にも「さえ」と同じような説明が通用できれば、「モダリティの文中形式」という概念はとりわけ一般性の高い概念であるということが言えよう。本研究では、「モダリティの文中形式」を議論することの可能性を論じてきたが、これまでの先行研究を踏まえた上で問題を提起することのみに留まっている。今後は、本研究を踏まえて、より多角的により綿密な考察を行い、個々のモダリティの文中形式について分析し考察することが求められる。

参考文献

- 市川保子 (1991) 「とりたて助詞と発話・伝達のパラダイムに関する一考察」『文芸言語研究 言語編』筑波大学文芸・言語学系, 53-71
- 伊藤健人 (2006) 「取り立て助詞とパラダイムについて」『Scientific approaches to language』5, 29-47
- 奥田靖雄 (1985) 「おしはかり (二)」『日本語学』2, 48-62
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店
- 奥津敬一郎 (1986) 「序章」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 尾上圭介 (1998) 「文の構造と“主観的”意味」『日本語の文に見られる主観性』(第7回 CLC 言語学集中講義における講義及びハンドアウト) CLC 日本語学院 ことばと文化センター主催
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味I』くろしお出版
- 菊地康人 (1999) 「サエとデサエ」『日本語科学』6, 7-31
- 教科研究東京国語部会・言語教育研究サークル (1963) 『文法教育 その内容と方法』むぎ書房
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究：助詞史素描』桜楓社
- 茂木俊伸 (2006) 「従属節内の「さえ」と「こそ」の解釈と構造」矢澤真人・橋本修編『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎 (1978) 「よこの限定の「だけ」の、たての構文機能へのかかわり」『群女国文』21 群馬女子短期大学
- 高橋太郎 (1983a) 「いわゆる副助詞の記述のしかたについて」『日本語学習と研究』対外経済貿易大学 (中華人民共和国)
- 高橋太郎 (1983b) 「いわゆる副助詞の記述のしかたについて続 1-5」『日本語学習と研究』対外経済貿易大学 (中華人民共和国)
- 寺村秀夫 (1981) 「ムードの形式と意味 (3) -取り立て助詞について-」『文芸言語研究言語編』6 筑波大学文芸・言語学系, 53-67
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味III』くろしお出版
- 中右実 (1979) 「パラダイムと命題」林栄一教授還暦記念論文集編集委員会編『英語と日本語』くろしお出版, 223-250
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のパラダイムと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (2000) 「認識のパラダイムとその周辺」森山卓郎、仁田義雄、工藤浩編『日本語の文法 3 パラダイム』岩波書店, 79-159
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4』くろしお出版
- 沼田善子 (1986) 「第2章とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, 105-225
- 沼田善子 (1989) 「とりたて詞とムード」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のパラダイム』くろしお出版, 159-192
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子編『時・否定と取り立て』岩波書店, 153-227
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房

取り立て助詞「さえ」の意味機能についての再考察
—モダリティとのかかわりから—

- 野田尚史（1995）「文の階層構造から見た主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, 1-35
- 野村剛史（2003）「モダリティ形式の分類」『国語学』54, 17-31
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 宮田幸一（1948）『日本語文法の輪郭』三省堂
- 渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房
- 山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会
- 刘先飞（2005）「论作为情意表达型语气形式的“さえ”」『解放军外国语学院学报』第28卷第3期, 18-21/25
- 邸薇（2005）「とりたて助詞「サエ」「マデ」「モ」からみたモダリティの文中形式」清華大学外国語学部修士論文
- 張威（2004）「论 Modality 的范畴意义与语气表达的句中形式—以现代汉语“就”和“才”的副词用法为例」『北研学刊』創刊, 140-153
- Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind*. The University of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅子訳 1991 『心のなかの身体』記伊國屋書店)

使用コーパス

- 北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス』（第一版）

辞書

- 佐伯梅友・森野宗明・小松英雄（1980）『例解古語辞典』三省堂
- 新村出（2008）『広辞苑』（第六版）岩波書店
- 松村明（1971）『日本文法大辞典』明治書院
- 松村明（2006）『大辞林』（第三版）三省堂
- 松村明（2012）『大辞泉』（第二版）小学館
- 山田忠雄（2005）『新明解国語辞典』（第六版）三省堂